

# ニュージーランド幼児教育海外研修プログラムの現状と課題

## － 研修ノートにみる学生の学びと新たな研修先の可能性への展開 －

やはぎやすこ なかはらあつのり おおしま  
矢萩恭子・中原篤徳・大島みずき

### <要 旨>

本研究では、田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科(2006～2009年度は人間福祉学部子ども家庭福祉学科)における選択科目「海外研修(子ども)」において2009年度3月より過去5回実施してきた海外研修プログラムについて、研修先であるニュージーランドの幼児教育(Early Childhood Education, 以下、ニュージーランドECEと呼ぶ)センターの見学と振り返りならびに学生の研修ノート分析結果から、新たな研修先として「プレイセンター Playcentre」を設定することの可能性について検討した。

まず第一に、現在行われている海外研修プログラムを概観することで、プログラム作成に至る経緯や、その充実度について示した。次に、これまで、幼稚園Kindergarten, 保育園Child Care Centre, 小学校Primary Schoolなどを研修先として現地の幼児教育および就学前教育に触れる経験をしてきた学生たちの研修ノートから、参加学生は海外研修で日本とニュージーランドの保育の違いを通じて異文化に出会い、その違いをもっと知り、理解したいと考えたことが明らかになった。そして、これらを踏まえ、本プログラムをより充実した研修としていくために、ニュージーランドの幼児教育制度において独自の特徴をもつ「プレイセンターPlaycentre」を研修先とする可能性について、保育者養成課程に不可欠な異文化や多様性への理解と子育て支援に関する学びを促す面から確認された。

### <キーワード>

海外研修, ニュージーランドECE, 研修ノート, 異文化理解, プレイセンター, 保育者養成, 子育て支援

## I. はじめに

### 1. 問題の所在

田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科(2006～2009年度は人間福祉学部子ども家庭福祉学科)では、選択科目「海外研修(子ども)」を設置し、過去5回(2009～2014年)、ニュージーランドにおいて実施してきた。これまで延べ62名の学生の参加があり、国際的な視野に立つ保育者養成を目的に研修を行ってきた。現行のプログラムは、ニュージーランド北島マナワ

ツ地方の中心都市Palmerston North(首都ウェリントンから北へ約200km, 車で2時間ほどの位置。人口約8万人, 面積約326km<sup>2</sup>の学園都市)のマッセイ大学Massey UniversityのMassay's Institute of Education and Centre for Professional and Continuing Education (PaCE)という留学生プログラムを担当する研修所を協定先として, 本学との交渉の下に作成されているものである。

マッセイ大学は, パーマストンノースの他, オークランドとウェリントンにキャンパスを持ち, 通信課程も含めると全体で約3万4千人の学生が学ぶ, ニュージーランド最大の大学の一つである。科学, 健康, 造形芸術, 人文社会科学, ビジネスの5つのカレッジがあり, その中にさらに教育や獣医学, 食品技術など特徴的な分野の教育機関が設置されている。国際交流も盛んであり, 100か国以上の国々から留学生を迎え入れており, 専門的な英語教育から異文化体験も含む初歩的な英語教育まで, 多様なニーズに応えられるよう複数の施設がある。マッセイ大学は, 留学生や他国からの研修生に優しいオープンマインドの大学ということができる。

ところで, 本研修内容については, 学生の感想や意見を聞く, あるいは仄聞することはあっても, 詳しく分析が行われたことはこれまでなかった。また, 引率教員も大学に出張報告書を提出してきたが, その情報は学科の教員間で共有されてこなかった。つまり, 研修内容の成果と課題が, 不明確であったと言える。そこで, 本研究では, これらを明らかにするため, 現行プログラムを振り返り, 今後の海外研修のあり方について検討していく。

## 2. 目的と方法

本研究の目的は, これまでの研修を概観・検証することにより, その成果や課題を明らかにし, 今後のプログラム内容をより充実化していくことにある。研究方法として, 以下の3点を示す。

- ・現行の海外研修プログラムの検討

現行のプログラムの研修内容を整理し, 考察する。

- ・本研修履修学生の研修ノートの分析

直近の2012年度, 2013年度の研修ノートを分析して得られたニュージーランドECEの訪問研修を通じた学生の気づきについて, 分析結果を考察する。

- ・ニュージーランドPlaycentreにみる学びの可能性についての検討

ニュージーランドの保育制度に位置づくプレイセンターPlaycentreについて概観しつつ, 現地のPlaycentre視察から得られた知見を整理し, 新たな訪問研修先としての可能性について考察する。

## Ⅱ. 現行の海外研修プログラムについて

1. 教科目:「海外研修(子ども)」1年次以上の選択の認定科目(2単位)

2. 研修の目的:国際的な視野に立って, 幼児教育及び福祉事業に携わることのできる人材を育成することを目的とする。※2014年度シラバス「本授業のねらい・到達目標」より抜粋。

### 3. 研修時期：2月末より約2週間(ニュージーランドでは、2月に新学期がスタートする)

※2,3年生は実習の時期と重なることもあり、現在、春休みに実習のない1年生が主として研修参加の対象となっている。実習と重ならない場合、上位学年の学生の参加は可能であり、2013年度には3年生2名が参加した。

### 4. 研修内容：

- ①ホームステイ先での生活
- ②Professional and Continuing Education (PaCE)における英語レッスン授業※写真参照
- ③ニュージーランドECE(幼稚園, 保育園, 小学校)センターの見学と振り返り
- ④マオリ文化体験(Maori Cultural Experience)
- ⑤農場体験(Farm Visit)
- ⑥ホストファミリーとの親睦会(Pot Luck Picnic)
- ⑦ウェリントン観光(Wellington Day Trip)
- ⑧修了式(Farewell Ceremony)※写真参照

※本研修内容については、本プログラム開発にあたって、2008年3月に行われた視察をもとに、その内容を協定先と協議して決定した。以後、③の具体的な研修先については、協定先機関が、現地の各施設に依頼・調整を行っている。なお、研修内容を記したプログラム例は、(表Ⅱ-3)を参照されたい。

※また、②については以下の内容になっている。

ア)日常英会話の練習, イ)就学前教育の特徴, ウ)ECEセンター訪問の振り返りと日本との比較

### 5. 協定先 :Massay's Institute of Education and Centre for Professional and Continuing Education

### 6. 募集定員 :10名以上

※毎年10～11月に大学の国際交流委員会が主催する本プログラムのガイダンスおよび学科内での履修希望者募集が行われる。現在、10名以上の学生の参加によって研修が成



図Ⅱ-1 ②授業風景



図Ⅱ-2 ⑧修了式

立しているが、20名を超える場合、マッセイ大学の現行のプログラムのキャパシティーを超える可能性があり、受け入れが困難となるようである。2014年12月現在、海外研修参加予定者は21名(2013年度19名)を数え、本学科の特徴的な研修として認識されているといえる。そうした学生からの求めに応えるためにも、研修プログラムの検討によって参加人数のキャパシティーの拡大と質の向上を今後図っていく必要がある。100名定員の保育を専攻する学生のうち、過去の参加者推移は表Ⅱ-1のとおりである。

表Ⅱ-1 過去の海外研修参加者推移と引率教員数

海外研修開催年月	参加者人数	引率教員数
2009年3月(2008年度)	20人	2人
2010年3月(2009年度)	0人	0人
2011年3月(2010年度)	8人	1人
2012年3月(2011年度)	7人	1人
2013年3月(2012年度)	8人	1人
2014年3月(2013年度)	19人	2人
2015年3月(2014年度)	21人(予定)	2人(予定)

\*なお、本研究筆者はそれぞれ2013年、2014年の引率を担当した。

7. 引率教員：子ども未来学科の専任教員(但し、参加人数により、1名～2名)

8. 費用：約40万～50万円

※費用については、研修参加人数、為替、燃料サーチャージなどの複数の要因により、毎年、料金が異なる状況となっている。

9. 事前指導および事後指導：渡航前後に以下の事前指導と事後指導を実施

<事前指導>

① プログラム説明および海外渡航手続きなどについて

内容：海外研修プログラムは、本学教員とマッセイ大学PaCEとの協議によって構築されているものであり、その内容について教員より詳細な説明を行う。海外渡航手続きに関しては、本研修の事務的な業務を負っている留学専門の旅行業者より説明を行う。

② ニュージーランドの歴史と文化について

内容：ニュージーランドは南半球に位置する国であり、長くイギリスの植民地であったためイギリスの習俗を持ちながら先住民であるマオリ族の風俗、言語を融合させた独自の文化を持った国といえる。この歴史的、文化的な点について、オセアニアを研究フィールドとする本学科教員が説明している。

③ 日本とニュージーランドの幼児教育制度の違いについて

内容：事前指導によって日本の幼児教育について基礎的な知識を獲得・確認しつつ、ニュージーランドの制度についても理解することにより、現地での訪問研修に十全を期すものである。ここでは、本研修に先立つ視察、引率の経験がある保育学を専門とする教員が説明する。

## <事後指導>

### ① 研修ノートの提出

内容：現在、研修ノートは本学で配付した研修全体に関するものとマッセイ大学PaCEでの語学研修用のものがあり、学びの記録や種々の配付資料を収録するものである。前者の研修ノートは、単位認定の根拠の一つとなるものでもあり、成績評価の参考としている。

### ② 研修反省会

内容：例年5月に研修反省会を、研修参加学生および本研修担当教職員が参加して行っている。研修の成果や反省について一人一人述べることにより、自身の研修を振り返り、深い省察へと繋げることが目的となっている。また、研修プログラムや本学、マッセイ大学の対応についても様々な意見が出され、建設的な内容の研修反省会となっている。なお、2013年度の研修反省会では表Ⅱ-2のような意見が学生から聞かれた。

表Ⅱ-2 2013 海外研修(子ども)反省会でのプログラムに関する学生の意見例

内容
・マオリのバイリンガルの施設に見学に行けるとのことであったが、自分はそうではないところを見学したので、バイリンガルの施設にきちんと行けるようにしてもらいたい。
・日本において実習の経験をしてから、ニュージーランドに行った方が良いように思う。自分は、2年生で幼稚園と保育所実習を経験してから行ったため、日本とニュージーランドの保育の比較ができて良かった。
・訪問する施設・園が4園であったため、4人通訳(実際には2名を2園に配置)を配置して頂けると、園の先生方のお話がより理解できたと思う。
・マッセイ大学の学生と交流したかった。
・もう少し研修期間を長くしてもらいたい。語学をしっかり学びたいから。

### ③ 学園祭における研修体験発表展示

内容：毎年11月の学園祭において、国際交流委員会企画として海外研修体験のポスター発表を行っている。これは、他学部の「海外研修(福祉)」と本学部の「海外研修(子ども)」の研修参加学生がグループに分かれて、それぞれテーマを決め、ポスター制作を行い、発表するものである。2013年度「海外研修(子ども)」の、グループテーマは、「日本とニュージーランドの幼児教育の違い」「マッセイ大学での学び」「ホストファミリー」「友人や現地の人たちとの交流」「観光」の5つのテーマであった。

## 10. まとめと考察

現行の海外研修プログラムを考察するにあたり、2013年度の海外研修反省会で学生から提起されたプログラムの問題点、要望についてまず眺めてみたい。

参加者の意見を大別すると①本プログラムの保育・教育に関するもの、②交流、③語学の3つに集約することができる。プログラム内容に対する具体的な意見については、参加者の多くが、それぞれの研修を振り返り、深く省察しつつ研修内容の改善に踏み込んだ発言をしていた。それぞ

れが自分の経験から考えを導き出し、自分の言葉で他者が傾聴に値する話をする事ができるようになったのは、今回の研修プログラムの成果の一つと言えるかもしれない。

また、学生からは現地の人々との交流についての意見も多く、交流を本プログラムの構成要素としてさらに明確に位置付けていく必要があることが分かった。この点における今後の課題として、マッセイ大学の教職員との交流だけでなく、大学生、地域の人々との交流が考えられる。学生の語学力が十分でなくとも、交流の機会の提供には今後、努力していくことが求められている。こうした観点から2014年度のプログラムよりマッセイ大学の学生との交流が企画されており、これまでにない新しい試みがスタートする。国際交流、異文化理解という研修のもう一つのテーマが、このような試みによって参加者一人一人の中に捉えられ、より充実した研修となることが期待される。

本研修では語学の習得にもかなりの時間を割いている。今回、研修を終えた学生の意見から語学学習を研修の主要な内容の一つとして捉えていることが見えてきた。本学の研修は、他の保育者養成校の海外研修と比して長く、時間の使い方が研修の成否にかかると言っても過言ではない。本研修では、語学研修と保育・教育関連施設の見学研修の時間が比較的バランスよく配置されている。今後、マッセイ大学との連携においては、当面この方式でプログラムを組んでいくことが妥当といえるのではないだろうか(現行の研修全体のプログラム例を表II-3に示す)。

表 II-3 海外研修プログラム例 (2013年度)

Den-en Chofu University Programme 2014

Day	Date	Morning	Afternoon
Sat	1-Mar	Arrival at Wellington International Airport. Travel to Palmerston North by coach Welcome to Massey University, PaCE. Introduction to Host Families(18:30)	
Sun	2-Mar	Host Family	
Mon	3-Mar	English Classes: Introductions, students & teacher goals, Homestay English	Orientation, Bus Orientation and City Tour
Tue	4-Mar	English Class: Oral Reports, Dairies, Homestay English	College of Education Lecture: Pre-School, Day Care and Early Childhood Education systems in New Zealand Preparation for ECE Centre visits Picnic (18:00)
Wed	5-Mar	Visit to ECE Centres	Free Afternoon
Thu	6-Mar	English class: Group discussion on centre visits.	English Class: Group work and presentations-a comparison between ECE Centres in Japan and NZ
Fri	7-Mar	Compulsory: Wellington Day Trip -8.00 to 19:00 (7:50 i-Site)	
Sat	8-Mar	Optional: Aanganui Day Trip -9:00 to 17:00 (8:50 i-Site)	
Sun	9-Mar	Host family	
Mon	10-Mar	College of Education Lecture: Introduction to Maori culture and overview of Maori bilingual and immersion ECE programmes Preparation for Maori Cultural Experience	Maori Cultural Experience(Return approx.16:00)
Tue	11-Mar	Visits to bilingual ECE Centres(8:30 i-Site)	English Class: Debrief on Bilingual ECE Centres Preparation for Primary School Visit
Wed	12-Mar	Primary School Visit(8:30 i-Site)	Farm Visit(Return approx.16:00)
Thu	13-Mar	English Class: Debrief on Primary School visit - a comparison between Primary Centres in Japan and NZ	Free afternoon
Fri	14-Mar	English Class: Farewell Preparation	English Class and Farewell(15:30)
Sat	15-Mar	Departure from Palmerston North to Wellington Airport(11:30 Hokowhitu Bus Stop)	

\*現地で参加学生に配布された資料を基に作成

以上のことから、国際的な視野に立って、幼児教育及び福祉事業に携わることのできる人材を育成することを目的とする本研修のプログラムは、概ねその目的を達成していることが考えられる。マッセイ大学PaCEの担当者からは、研修開始6週間前までならば、プログラムの変更も可能であるとの申し出を受けており、内容の充実化には積極的に対応する姿勢が示されている。子ども未来学科の専任教員はこれまで延べ7名が研修の引率を行っており、ニュージーランドの保育・幼児教育に対する知見の蓄積はかなり進んでいるとあってよい。今後、より良い研修の実施のためにも教員間の意見交換を行い、プログラム内容の充実を図っていく必要がある。

では、今後どのようなプログラムの改良が可能であろうか。本論では以降、履修学生の研修ノートにおける研修の目的設定と研修における学び、さらに現在のニュージーランドの保育の現状から新たなプログラムの可能性について考えていく。

(中原篤徳)

### Ⅲ. 学生の研修ノートの分析

#### 1. 目的

海外研修参加学生は具体的にどのような目的意識をもって臨み、ニュージーランドの幼児教育に触れることで、どのような気づきを得ているのだろうか。2013年、2014年に海外研修に参加した学生のうち、資料が確認された学生19名に対し、研修ノートの記録内容の分析を行うことで、本研修が参加学生にとってどのような知識を得る機会になっているかを明らかにする。また、本研修の特徴でもあるニュージーランドの幼児教育施設、及び小学校への訪問の中で、参加学生がどのような気づきを得ているのかについても検討を行う。

ここで分析の対象とする研修ノートとは、海外研修参加学生全員に研修前に大学から配布されるB5判大のリングファイルであり、参加学生は研修前には事前研修で学んだ内容、研修の目的・楽しみ、研修中には日々の英語の授業での学びと感想、訪問先での気づき、研修後には研修全体のまとめと反省をそれぞれ約1ページにわたり記録する。研修ノートは海外研修後に回収され、担当教員による海外研修の成績評価のための要素の一つとして使用される。

#### 2. 方法

1)分析対象 2012年度、2013年度にニュージーランド海外研修に参加した学生計19名の研修ノート2012年度参加学生3名、2013年度参加学生16名(うち1年生18名、3年生1名)である。

2)分析方法 研修ノートの内容から以下6点にわたる項目について記述内容を抜粋した。「研修に参加する目的・目標」「研修プログラムの中で楽しみにしていること」「ECEセンターでの日本では見たり聞いたりしたことがなかった情報・日本と違うと感じた情報(以下、ECEセンターでの気づき)」「バイリンガルECEセンターでの日本では見たり聞いたりしたことがなかった情報・日本と違うと感

じた情報(以下,バイリンガルECEセンターでの気づき)」「小学校での日本では見たたり聞いたりしたことがなかった情報・日本と違うと感じた情報(以下,小学校での気づき)」「研修の反省点」。なお,「研修の目的」「研修プログラムの中で楽しみにしていること」については研修前,「研修の反省点」は帰国後に記載したものである。

以上の研修ノートの項目ごとに,海外研修引率経験のある本稿執筆者が記述内容についてカテゴリーを作成し,参加学生のノートにそれぞれのカテゴリーについての記述がどれくらい挙げられているかを示した。

**3)訪問先** 本研修中,参加学生は3種類の施設(保育園および幼稚園などのECEセンター,バイリンガルECEセンター,小学校)にそれぞれに約半日訪問した。訪問中は施設の見学や子どもとの触れ合う時間が設けられた。ECEセンター,バイリンガルECEセンターへは参加学生が4,5名ずつのグループに分かれ,同時に複数の施設を訪問した。小学校については全員での訪問となった。訪問先は以下の通りであった。

①ECEセンター:Palmerston North市内の保育園および幼稚園

(訪問先:Hokowhitu Children's Centre, Massey Child Care Centre Incorporated, Parkland Kindergarten, Turitea Childcare Centre)

②バイリンガルECEセンター:ニュージーランドの先住民文化であるマオリ文化に加え,ポリネシアなど周辺地域の文化,またヨーロッパ系移民の文化など多文化が共存すると考えられるPalmerston North市内のECEセンター

(訪問先:Puddleducks'Nursery & Preschools, Takaro Kindergarten, Te Aroha Noa Early Childhood Centre, Wanagna Pre School)。

③小学校 Palmerston North市内の小学校(訪問先:Opiki School, Parkland School)

なお,訪問先の選定は,協定先であるMassey大学の留学生受け入れ部門(PaCE)が行った。

### 3. 結果と考察

#### 1) 研修に参加する目的・目標

研修に参加する目的についての一人当たりの平均記述内容数は2.53(SD=.68)であった。記述内容を分類したものを表Ⅲ-1に示す。

表Ⅲ-1 研修の目的

	記述人数
日本とNZの保育の違いを学ぶ	14 (73.68)
NZの保育を学ぶ	7 (36.84)
英語力を向上させる	9 (47.37)
将来につなげる	6 (31.58)
コミュニケーション力をつける	5 (26.32)
NZの文化を学ぶ	3 (15.79)
その他	4 (21.05)

( )内は記述者の割合

参加学生の73.68%が研修の目的を【日本とNZの保育の違いを学ぶ】ことにおいていた。また、【NZの保育を学ぶ事】を目的としてあげる学生も36.84%いたことから、参加学生が本研修をニュージーランドの保育を学ぶ機会と捉えていることがわかった。また、研修を、勉学や将来に生かしていきたいという回答も見られた(31.58%)。

保育を学ぶことに次いで目的・目標として多い記述は【英語力の向上】を目的とする内容であった(47.37%)。また、【コミュニケーション力をつける】ことを目的としている学生も26.32%いたことで、日本語が通じない中での意思疎通を学習する機会を積極的に体験したいと考えていることが伺えた。

## 2) 研修に参加する楽しみ

研修に参加する楽しみについての一人当たりの平均記述内容数は2.05(SD=1.10)であった。記述内容を分類したものを表Ⅲ-2に示す。

表Ⅲ-2 研修の楽しみ

	記述人数
ECEセンターの訪問	14 (73.68)
NZの子どもと触れ合う	7 (36.84)
日本とNZの保育の違いをみつける	7 (36.84)
ホームステイ	4 (21.05)
その他のプログラム	2 (10.53)
将来に生かす	2 (10.53)
その他	3 (15.79)

( )内は記述者の割合

参加学生の73.68%が【ECEセンターの訪問】を楽しみなこととしてあげていた。また、訪問する中で【子どもと触れ合うこと】(36.84%)も楽しみにしているようであった。保育を学ぶ参加学生にとって、ECEセンターに直接訪問し、その中で生活する子どもたちと触れ合うことがなよりの学習機会となり、それを楽しみにしていることが示された。

## 3) 幼稚園・保育園などのECEセンターでの気づき

ECEセンター訪問により得られた日本にはない点、日本とは違う点に対する気づきについての一人当たりの平均記述内容数は3.95(SD=1.36)であった。記述内容を分類したものを表Ⅲ-3に示す。

幼稚園や保育園といったECEセンターでの気づきとして、参加学生の68.42%が【屋外・屋内環境の違い】について言及した。具体的には、室内については年齢により建物が分かれていることや、午睡場所としてそれ独立したベッドが存在することについての記述があった。また、保育室の中にピアノがないことや、モニターが付いていることなど、彼らがこれまで経験した幼児教育施設とは異なる印象を受けたようであった。

63.16%の参加学生が【子どもの活動の自由さ/集団活動の少なさ】についての記述を行っていた。おやつや午睡の時間が定まっていないことや、一斉にする活動がほとんどない様子から、参加学生はニュージーランドの保育を日本よりも「自由」であると感じたようである。また、15.79%の学生は【子どもの主体性】という言葉を使用して、ニュージーランドの保育を説明していた。

表Ⅲ-3 ECE センター(幼稚園・保育園)での気づき

	記述人数
NZの保育の制度	6 (31.58)
子どもの主体性の尊重	3 (15.79)
子どもの活動の自由さ/集団活動の少なさ	12 (63.16)
先生と子どもの関わり	8 (42.11)
屋外, 屋内環境の違い	13 (68.42)
保育の内容の違い	8 (42.11)
保育記録(ポートフォリオ)	8 (42.11)
おもちゃや遊具の違い	5 (26.32)
保育の中の多文化性	4 (21.05)
先生の様子	3 (15.79)
子どもの様子	2 (10.53)
社会保障の場としてのECEセンター	0 (0.00)
その他	3 (15.79)

( )内は記述者の割合

42.11%の参加学生が記載した【保育の内容の違い】は、室内での靴の着脱や、当番の決め方などについての記述であった。このカテゴリについては訪問園による違いも大きかった。しかし、日焼け止めをこまめに塗るなど、ニュージーランドの気候に即した保育者の仕事についての記述もみられた。また、【保育記録(ポートフォリオ)】についての気づきを記述したのは42.11%の学生であった。保育記録の方法として個々の幼児の成長を写真と文章で記載しているポートフォリオは学生には新鮮だったようだ。また、ポートフォリオが幼児を含め誰でも見られるものとして置いてあることや、教員が常にカメラを持ち歩き、子どもの行動を記録している様子などについては複数の記述が見られた。

#### 4) バイリンガルECEセンターでの気づき

バイリンガルECEセンターへの訪問により得られた日本にはない点、日本とは違う点に対する気づきについての一人当たりの平均記述内容数は3.00(SD=.92)であった。記述内容を分類したものを表Ⅲ-4に示す。

57.89%の参加学生が【屋外, 屋内環境の違い】について記していた。具体的には、様々なコーナーが室内に設けられていることについての記述がみられた。特に大工道具コーナーについて記述している学生が複数いた。さらに57.89%の参加学生が【遊具・教材の違い】に着目していたが、その中でも子どもが大工道具(ハンマーやのこぎり)を教材のひとつとして自由に使うことへの言及が見られた。危険なものも教材として子どもに自由に使用させる環境が彼らにとっては驚きであったようだ。

バイリンガルECEセンターへの訪問で【保育の中の多文化】について触れていた参加学生は47.37%であった。マオリ文化だけではなく、周辺地域のポリネシア文化、またヨーロッパなどから移住してくる人々の文化を大切に、それを絶やさないう努めている様子が、幼稚園の室内装飾や、活動(歌やハカ)などにみられたことが記述されていた。また、マオリの文化が欧米文化と

表Ⅲ-4 バイリンガルECEセンターでの気づき

	記述人数
NZの保育の制度	4 (21.05)
子どもの主体性の尊重	0 (0.00)
子どもの活動の自由さ/集団活動の少なさ	3 (15.79)
先生と子どもの関わり	5 (26.32)
屋外, 屋内環境の違い	11 (57.89)
保育の内容の違い	4 (21.05)
保育記録(ポートフォリオ)	2 (10.53)
遊具・教材の違い	11 (57.89)
保育の中の多文化	9 (47.37)
先生の様子	2 (10.53)
子どもの様子	3 (15.79)
社会保障の場としてのECEセンター	3 (15.79)
その他	0 (0.00)

( )内は記述者の割合

表Ⅲ-5 小学校での気づき

	記述人数
NZの教育制度	10 (52.63)
自由さ・主体性	5 (26.32)
学習のカリキュラム	6 (31.58)
教室環境(机の位置など)	8 (42.11)
少人数学習(グループ学習)	5 (26.32)
能力別学習(レベル別学習)	5 (26.32)
基礎運動訓練(5歳児用)	11 (57.89)
学習支援	10 (52.63)
学習方法	3 (15.79)
学習機器(タブレット端末,PCの使用)	8 (42.11)
屋外環境(校庭・遊具)	8 (42.11)
屋外遊びの様子	3 (15.79)
教室内の教員数	3 (15.79)
教員	2 (10.53)
その他	2 (10.53)

( )内は記述者の割合

共存するニュージーランドでは、社会保障も重要である。バイリンガルECEセンターが地域の社会保障の場となっていることについても15.79%の参加学生が記述していた。ECEセンターが十代の母親の社会勉強の場となったり、時に子どもの栄養状態を支える役目を果たしたりなど、多くの生き方、考え方が存在する多民族国家の社会保障の難しさがニュージーランドのECEにも影響していることが、学生にとっては発見となったようだ。

### 5) 小学校での気づき

小学校訪問により得られた日本にはない点、日本とは違う点に対する気づきについての一人当たりの平均記述内容数は4.68(SD=1.41)であった。記述内容を分類したものを表Ⅲ-5に示す。

参加学生の記述で最も多かったのは、入学したばかりの児童を対象とした【基礎運動訓練】についてであった(57.89%)。小学校見学时、単純な動きで楽しみながら基礎的な運動を行うことで、脳全体の発育を促すと言われるBrain Gymの活動を見学したこともあり、就学した直後から行われるこのような基礎運動訓練についての記述が多くなったと考えられる。【NZの教育制度】(52.63%が記述)、は上記の【基礎運動訓練】とも関わるものである。ニュージーランドの小学校への入学が主に5歳の誕生日を迎えた次の日であり、入学日が各児童で異なることについての記述であった。一斉に入学する日本の教育制度とは異なるこの点が参加学生にとっては興味深かったようである。また、個別に入学するからこそ行われる新入学児童に対する基礎運動訓練などの細かいケアは、魅力的に見えたようであった。

また、グループに分かれた【少人数学習】や、自分のレベルに合わせた課題を実施することについての【能力別学習】、援助が必要な児童への【学習支援】についての記述も多く、ニュージーランドの教育制度が一人一人のレベルに応じた教育であることを発見とした参加学生が多いことが示された。

## 6) 研修における反省点

研修における反省点についての一人当たりの平均記述内容数は、84(SD=.49)であった。記述内容を分類したものを表Ⅲ-6に示す。

表Ⅲ-6 研修における反省点

	人数
英語力の不足	9 (47.37)
コミュニケーションの不足	3 (15.79)
記録の不備	2 (10.53)
知識の不足	2 (10.53)

( )内は記述者の割合

47.37%の参加学生が自身の【英語力の不足】を反省点としてあげていた。ホストファミリーと関わる上でも、ECE施設の訪問においても、言葉の壁を感じたのだろう。ECEセンター訪問時には疑問点を尋ねることができなかったこと、尋ねられたとしても答えを十分に理解することができなかったことを反省する記述も見られた。積極的にコミュニケーションをとることができなかったこと(15.79%)も反省点としてあげられていたが、英語力への自信からくるものの可能性も考えられる。また、記録をしっかりとることができなかったこと(10.53%)を反省点とする学生もいた。研修中は課題も多く、一つ一つの気づきを書き留めることができない学生もいたようだった。さらに、日本の保育についての【知識が不足】していたことで、ニュージーランドのECEとの比較が十分に行えなかったことを反省点とする学生もいた(10.53%)。本研修の参加者の大部分が実習を体験していない1年生である。そのため実際の日本の幼児教育の現場をまだ知らないために、比較を行うことが難しいと感じたのだろう。

#### 4. 結論

海外研修参加学生の研修ノートの分析から、参加学生が本研修をニュージーランドの保育を学び、またニュージーランドの保育を直接体験することを通して、日本の保育との違いを学ぶことを主な目的と考えていることが明らかになった。また、各施設を訪問したことで気づきでは、保育環境の違いや遊具・教材の違いなどについての記述が多く、日本とニュージーランドでは子どもたちが過ごす環境に大きな違いを感じたようであった。本研修では現在、学生1名につき2か所の幼児教育施設と1か所の小学校を訪問している。小学校以外の幼児教育施設へは、その規模や保育への影響を考慮して、見学実施にあたっては、学生を4,5名程度の少人数グループに分けており、見学施設数は、合計8～10施設程となっている。その中だけでも、異なる種類の幼児教育施設が存在しているが、多様な幼児教育施設をもつニュージーランドにおいて、その多様性をさらに実感できる訪問先を検討することは、参加学生の気づきや学びをより一層促すことにつながると考えられる。

一方、研修ノートの反省点の記述からは英語力の不足により、学びが阻害されてしまったことを反省する記述が多く見られた。研修の目的に語学力の向上をあげる参加学生も多かったが、実践的な英語力を身につけることは、短い期間では難しいことがうかがえる。また、日本の保育についての知識不足も反省としてあげられていた。本研修では事前指導として出発前に保育を専門とする学科の教員が日本とニュージーランドの保育制度について講義を行っている。しかし、本研修への参加者は、この時期に実習が設定されていない大学1年生中心であることや、彼らにはまだ正規実習の経験がないことから、日本の保育現場についての知識や経験は多くはない。このことについては、事前指導で最低限の知識を身につけてから研修に臨む一方で、研修において自身の保育についての知識や経験の少なさを実感することもまた、帰国後の大学での学びや実習へのモチベーションとなることと期待したい。

(大島みずき)

### Ⅳ. ニュージーランドPlaycentreにみる学びの可能性

#### 1. 本稿の背景

第Ⅱ節表Ⅱ-2の研修反省会における意見例や第Ⅲ節の4.結論にもあるとおり、本学子ども未来学部子ども未来学科の「海外研修(子ども)」に参加する学生の中心は1年生であるため、日本の保育に関してもその学びや経験が浅く、日本とニュージーランドの保育を比較考察するに足る十分な素地を身に付けているとは言い難い。これは、昨今の保育者養成校が抱えるカリキュラム実施上の課題とも言えるが、研修時期にあたる春期休暇中(あるいはこれを夏期休暇期間中に変えたとしても)は、授業期間外に設定される各実習期間との重複があるためである。2013年度の本研修に参加した2名の3年生は、施設実習終了翌日に海外研修へ出発したが、このようなスケジュー

ルを覚悟して本研修に参加する上位学年の学生は稀である。それだけに、当事者である彼らの意見は貴重であると言えよう。

学生は、海外に出て、気候・風土、歴史や伝統、言語や宗教、仕事や働き方、家族や友人関係のほか、いろいろな生活習慣に触れながら、協定先大学の付施設での語学研修やホームステイ先において、異文化における生活を経験し、さらに、現地の幼児教育施設の見学研修に臨むことにより、保育を通じてまた、異文化と出合う経験をする。それは、国によって、その制度や保育内容や保育者養成に違いをもちつつも、子ども自身の遊び(活動)と生活を基本として展開される保育という営みが極めて、その国の文化や価値観、家族の生活や社会における子どもや子育ての意義そのものをも映し出す営為であるからに他ならない。そして、前節の学生の研修ノートの分析において明らかとなったように、学生自身もニュージーランドの保育について学び、日本とニュージーランドの保育の違いを学ぶことを英語力の向上以上に研修の目的として認識している(表II-1)。また、ニュージーランドECEへの訪問とそこでのニュージーランドの子どもたちとの触れ合い、日本とニュージーランドの保育の違いをみつけることが研修に参加する楽しみとして挙げられている(表II-2)。さらに、実際に、ニュージーランドECEセンター訪問から得られた気づきについて、日本との比較から保育制度をはじめとする多岐にわたる項目が示されており(表II-3、表II-4)、日本の保育に関する知識や経験が浅いという前提に立ってもなお、本研修に関して一定の成果は十分に得られていると言える。

但し、保育に関する知識や英語力の不足から、その場に及んで十分に質問ができなかったことや、質問に対する答えを十分に理解できなかったこと、せっかくの気づきを十分に記録することが困難であったことなどが課題として認識されている(表II-6)のも事実である。

そこで、前節までに確認されたこのような参加学生の実態を鑑み、過去5年を経過した本研修プログラムにおけるニュージーランドECEセンター見学研修のさらなる可能性を検討する必要性があると考え、本稿を試みた。

## 2. 目的

多様な就学前教育のための保育・幼児教育の場が存在することが、ニュージーランドの保育の特徴の一つであると言われているが、保育センター、幼稚園、家庭的保育に次ぐ、認可保育施設であるプレイセンターPlaycentreは、保護者が中心となって運営しているニュージーランド独自の認可保育施設である。本稿では、このプレイセンターを、本学科のニュージーランド海外研修における見学先の一つに加える意義について検討・考察する。

## 3. 方法

まず、ニュージーランドの保育政策ならびにプレイセンターについて概観し、プレイセンターに関する国内の先行研究を検討する。また、筆者が、2014年3月の海外研修の引率補助として

Palmerston Northに滞在した際に行った現地のプレイセンター視察結果と総合して考察する。

#### 4. ニュージーランドの保育政策について

##### (1) ニュージーランドの多様な保育施設

ニュージーランドの代表的な保育施設として、まず幼稚園がある。松川(2004)<sup>1)</sup>によれば、1889年、南島のダニーデンDunedinに市民の寄付や善意により最初の幼稚園が開設された。移民を中心とした国であるニュージーランドでは、その開拓の歴史において、労働に従事する両親の下で放任されて過酷な状況にあった子どもたちのために、このような非営利型の無償幼稚園が作られたという。当初は資金面から苦渋した無償幼稚園も、その後政府からの助成金が増加して一般的に普及するにつれ、単に幼稚園と呼ばれるようになり、その運営も、中産階層の女性たちによる社会的活動から、子ども達の保護者に移ったとのことである。また、鈴木(2013)<sup>2)</sup>によれば、ニュージーランド幼稚園法人New Zealand Kindergartens Incorporatedや、ニュージーランド無償幼稚園連盟New Zealand Federation of Free Kindergartensなどに属する幼稚園は、公的性格が強く原則無償で、保育者全員が有資格者であり、4歳児は午前中週5日、3歳児は午後週2、3日の園が多いが、現在では、全日保育や2歳児保育を実施している園も増加しているという。

一方、ウェリントンなどで慈善機関として開設されて以来、国からの助成金も得られず長く劣悪な条件下に置かれていた保育所であるが、1960年によく保育センター規則が制定され、その後女性の社会進出に伴う需要が増し、1985年には有資格者の配置が義務付けられた。この保育センター Education and Care Centre は、幼稚園、プレイセンター、コハンガレオを除く保育の場の総称であり、保育所の他に、モンテッソーリやシュタイナー教育を行っている私立の保育施設も含み、その運営主体は、個人、トラスト、企業などから成るものである<sup>3)</sup>。

また、本稿で取り上げようとしているプレイセンターは、1941年首都ウェリントンにて創設された、運営も保育自体も保護者が中心となって行われる保育施設である。その他、先住民マオリ族の言語や文化の伝統を保護する目的をもつコハンガレオTe Kohanga Reoや、家庭内保育Home-based ECE、院内保育Hospital-based ECE、国立通信教育学校保育部門 Distance Education Service、といった認可保育施設や、認可Lisensedではなく、許可Certificatedを受けている保育施設として、プレイグループPlaygroupsという保護者による子育てサークルのような保育施設もある。

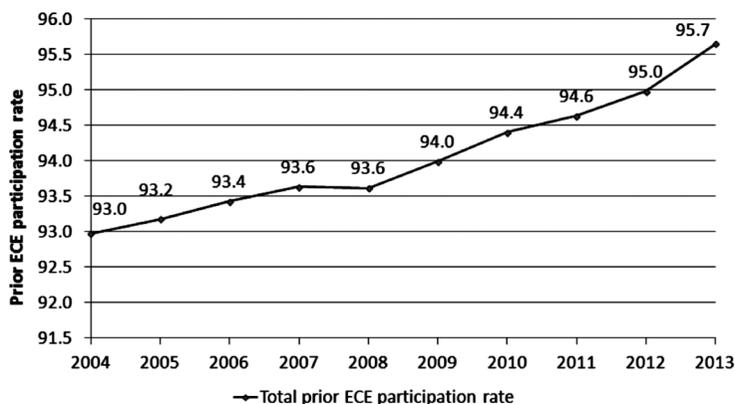
以下、2013年現在のニュージーランドにおける認可保育施設の構成割合(施設数)<sup>4)</sup>(表IV-1)ならびに、ニュージーランドECEの全就園率の変化(図IV-1)<sup>5)</sup>と各保育施設別の登録数の変化(表IV-2および図IV-2)<sup>6)</sup>、年齢別就園率の変化(図IV-3)<sup>7)</sup>を示す。これらによると、現在は、9割以上が何らかの認可保育施設に登録しており(但し、これには民族グループごとに差異があるのが実状である)、その登録先としては、保育センターEducation and Care Centreへの登録割合が全体の半数以上(2013年で12万人以上)を占めている。また、幼稚園への登録数は減少傾向(2013年で4万人を割っている)にあり、2013年の就園率を年齢別に見ると、0歳で約15%、1歳で

40%以上, 2歳で60%以上, 3歳では約95%, 4歳になるとほぼ100%となっている。

表Ⅳ-1 NZにおける認可保育施設の構成割合(2013)

認可Licensed 保育施設種別	保育施設数	割合
保育センター Education and Care Centres	2,334	54.50%
幼稚園 Kindergartens	643	15.00%
家庭内保育 Home-based Services	359	8.40%
プレイセンター Playcentres	449	10.50%
コハンガレオ Te Kohanga Reo	467	10.90%
一時保育所 Casual Education & Care	19	0.40%
院内保育 Hospital-based Services	14	0.30%
合計	4,285	100.00%

日本保育学会第67回大会国際シンポジウム資料p.7を基に作成



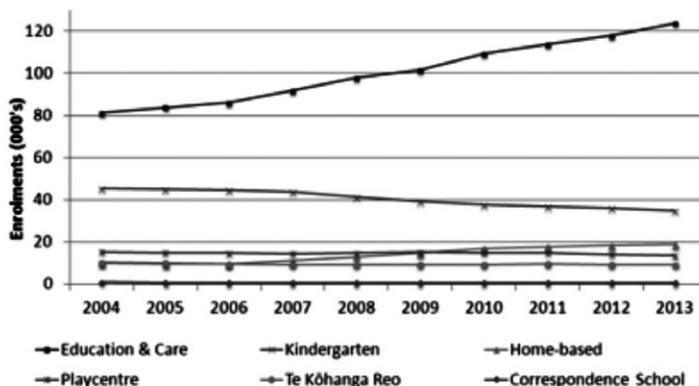
図Ⅳ-1 全就園児率の変化(2004-2013年)

Ministry of Education of New ZealandのHP(2014)より一部抜粋

表Ⅳ-2 保育施設別の就園児数(2004-2013)

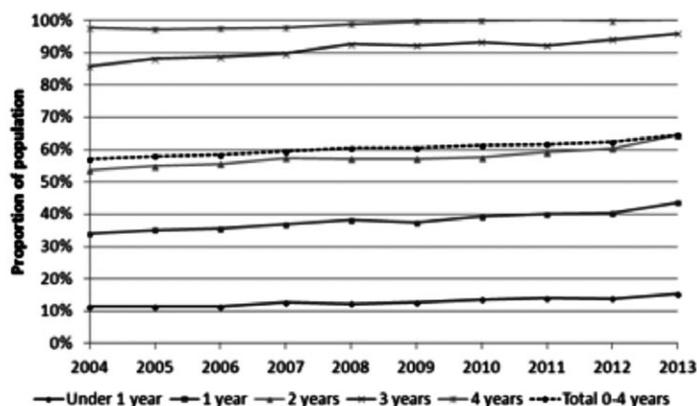
Service type	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	Difference 2012-2013		Difference 2004-2013	
											n	%	n	%
Education & Care	81,096	83,889	86,059	91,733	97,756	101,424	109,204	113,876	117,733	123,755	6,022	5.1	42,659	52.6
Kindergarten	45,287	44,920	44,435	43,695	41,487	39,346	37,600	36,967	36,208	35,012	-1,196	-3.3	-10,275	-22.7
Home-based	9,922	9,770	9,802	11,073	13,065	15,054	17,084	17,955	18,412	18,820	408	2.2	8,898	89.7
Playcentre	15,440	15,059	14,888	14,664	14,929	15,171	15,049	15,112	14,297	13,568	-729	-5.1	-1,872	-12.1
Te Kohanga Reo	10,418	10,070	9,493	9,236	9,165	9,288	9,370	9,631	9,366	9,179	-187	-2	-1,239	-11.9
Correspondence School	922	813	577	737	591	627	617	560	519	588	69	13.3	-334	-36.2
Total	163,085	164,521	165,254	171,138	176,993	180,910	188,924	194,101	196,535	200,922	4,387	2.2	37,837	23.2

Ministry of Education of New ZealandのHP(2014)より一部抜粋



図IV-2 保育施設種別の就園児数の変化(2004-2013年)

Ministry of Education of New Zealand のHP(2014)より一部抜粋



図IV-3 年齢別就園率の変化(2004-2013年)

Ministry of Education of New Zealand のHP(2014)より一部抜粋

## (2) ニュージーランドの幼保一元化政策

ニュージーランドは、1986年、教育省Ministry of Educationのもとに幼保一元化が実現されたことで知られるが、これにより、「教育Education」と「養護Care」が統合され、5歳以下のすべての子どもの保育を教育省が管轄することとなった。それまで社会福祉省が所管し、長い間その質の問題が指摘されていた保育センターEducation and Care Centreが、教育省の所管におかれることで、施設やカリキュラムの基準に関する政策の規制を受けると同時に、政府からの助成金を受けた就学前教育施設としての運営となることにより、質の向上が図られた。

ニュージーランドは、社会情勢の変化とともに、次々と新たな教育改革を行ってきており、1989年の新しい教育法に基づく大規模な改革では、それまで低く抑えられてきた保育所に対する助成金を増やし、女性の就労率増加に対応し、1996年には、多様な保育施設の保育の質を保障するためのナショナルカリキュラムであるテ・ファリキTe Whāriki が制定された。大宮(2006)<sup>8)</sup>の説明によ

ると、この新たな幼児教育カリキュラムのガイドライン制定には、実践家、研究者、研究機関、先住民マオリ族の代表、親、相談期間、政府機関、教員組合等の関係者による、5年間の歳月をかけた議論が展開されたという。また、「ファリキ」というマオリ語は、「織り上げられたもの」という基本的な意味の他に、「マット」「くもの巣」といった比喩的意味があり、カリキュラムに示された目標を達成するための具体的な方法や内容は、各施設にゆだねるべきであるという意味に加え、子どもはその知識や技能を直線的に増加させて成長するのではなく、様々な経験や意味のある生活を通じて徐々にその内面を豊かにしていくという成長イメージを意味しているということを大宮(2006)は、強調している。

テ・ファリキTe Whāriki制定後の1998年には、「教育(乳幼児サービス)規則 The Education (Early Childhood Services) Regulation」が成立し、その概要は以下のとおりである<sup>9)</sup>。

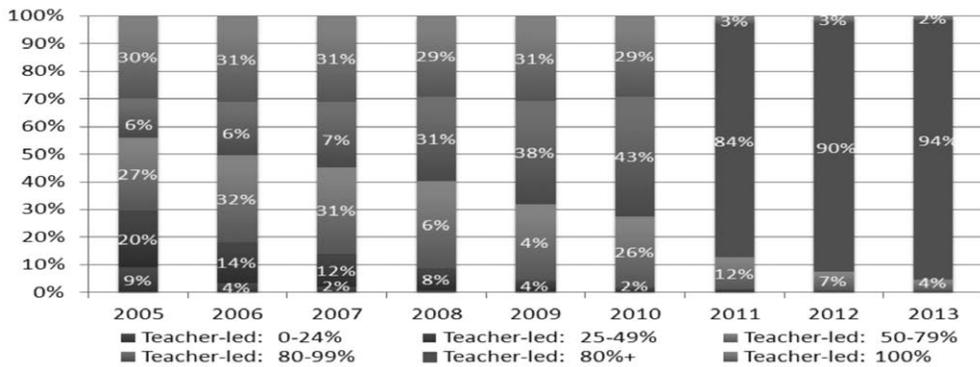
- ・配置基準／2歳未満児(全日・半日保育)5対1 ※但し、0歳児には加配している園もあり。  
2歳以上児(全日保育)10対1、(半日保育)15対1
- ・施設規模／2歳未満児20名以内(75名以内) ※但し、2011年の施設規模規定で( )に増加。  
2歳以上児・混合50名以内(150名以内)
- ・保育者の資格／全員有資格者の幼稚園を除いて「責任者1人」
- ・保育者の名称／教師、教育者、職員、大人、養育提供者など多様

これに対して、保育の質向上に不可欠な課題として、有資格保育者qualified teacherと登録保育者registered teacherの割合を2007年までに50%、2010年までに80%、そして2012年までに100%という目標が掲げられたが、これは2012年で80%と下方修正されている。2013年で、有資格者80%以上の施設が全体の94%を占める一方、100%の施設は2%のみであり、有資格者が50-79%の施設も4%存在し、25-49%の施設も若干あるようだ(図IV-4)<sup>10)</sup>。

また、ニュージーランドでは、初めは幼稚園・保育センター・家庭的保育の3,4歳児に、2010年には、5歳児、プレイセンター、コハンガレオにもその適用が広がり、3歳から5歳の子どもの保育に対して週20時間の無償教育が実施されている<sup>11)</sup>。

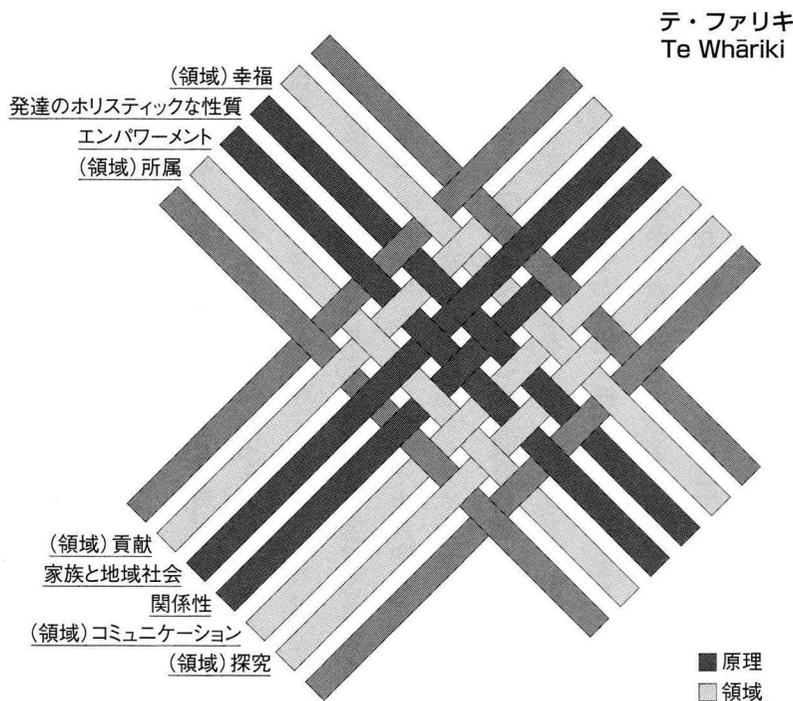
### (3) 保育の質とナショナルカリキュラム“テ・ファリキ(Te Whāriki)”

幼保一元化を遂行したニュージーランドの就学前教育において、1996年に登場したテ・ファリキTe Whārikiであるが、カリキュラム開発には、マーガレット・カーMargaret Carr(ワイカト大学)とヘレン・メイHelen May(当時ワイカト大学)を中心とする研究プロジェクトと、多くの実践者practitionersとの協同により進められた。子どもたちが学び手として成長し、生涯にわたって学び手であり続けるためには、その関心や意欲が育まれるための環境が必要であるとし、その学びの成果learning outcomeをテ・ファリキTe Whārikiにも5つの領域として示されることになる要素(幸福・所属感・コミュニケーション・貢献・探究)が織り合わさったものとして捉えたカリキュラムを開発したのである。そのためには、子どもの「学びの物語」をアセスメントする必要がある、それは、カー自身が、幼稚園教諭をしていた20年前に理解していた、小学校に入るためのスキルや知識をチェックリスト化し



図IV-4 有資格保育者を有する施設の割合(2005-2013年)

Ministry of Education of New Zealand のHP(2014)より一部抜粋



図IV-5 テ・ファリキTe Whārikiの4つの「原理」と5つの「領域」

(出典：大宮勇雄「学びの物語の保育実践」ひとなる書房,2010年,p.191)

て個別に行われる旧来のモデルによるのではなく、学び手を「行為の中の学び手learner-in-action」と捉え、学び手が環境と複雑に影響しあう応答的な関係を明らかにして記録する方法を追求する新たなモデルを示す必要があったのだと言う<sup>12)</sup>。

ところで、大宮(2010)<sup>13)</sup>は、保育の質とは何かを定義することをせずに、保育者に自己評価を求めている保育所保育指針や、本来企業効率を向上させるための方法であるPDCAサイクル(Plan-Do-Check-Action)を安易に導入することに批判的検討を行い、保育者がチェックリストに

よるのではなく、日々の保育の中で子どもが経験しているものの質を自分の言葉で語らなければならないと述べている。特に、子どもが困難な課題に立ち向かう構えや行動を、周囲の活動に「参加する一つのレパートリー」として、それが別の場面においてもより複雑な形で立ち向かうことができるようになっていくプロセスを発達と捉えようとしているというふうにかーの主張を解釈し、一人ひとりの子どもを「豊かな可能性をもった存在」として見る「子ども理解」の重要性に触れている。大宮(2010)によれば、保育の質については、「結果の質」ではなく、こうした「プロセスの質」の評価こそが、保育の質の向上につながるものであるという考えが広がりつつあると言うのである。

そして、以上の考え方を、定訳がなく、保育理論としての論究があまりなされていないとされるテ・ファリキTe Whārikiの解説においてさらに明示しているが、ここでは、よく紹介される5つの領域(子どもの学びと発達の基本的領域)と4つの原理(保育の原理)が、織り糸のように複雑に織り合わさって一枚の織物のように示されている図を確認することに留める(図IV-5)。

## 5. プレイセンター Playcentreに関する先行研究の検討

次に、その運営と保育の全てを保護者が互いに協力して行うことにより、保護者同士が育ち合う場を保障しているプレイセンターについて見ていくことにする。全て保護者によると言っても、そこにはしっかりとしたいわゆる親教育プログラム Parents Studyがあり、ナショナルカリキュラムであるテ・ファリキTe Whārikiが実施され、国からの助成金を受けた施設とその保育は、3年に1度教育評価局Education Review Officeによる評価 Evaluation を受け、高い保育水準が保障されていることから、プレイセンターは、他に類をみない就学前の保育施設であると言える。しかし、前節でみたような保育センターにかかわる政策の転換により保育所への助成金が増して利用者が増えたことや、女性の社会進出・就労率の増加などにより、1976年の最盛期には、790か所2万人を超える参加家族があったが、近年は、減少傾向をたどっており、2013年には、全国プレイセンター連盟The New Zealand Playcentre Federationが統括する各地域の33の協会の下には、449施設1万5千人ほどまでに減少している。

池本(1999)<sup>14)</sup>は、プレイセンターの前身となる組織は3つあり、それらが、1948年にニュージーランド・ナーサリー・プレイセンター・フェデレーションとして発足したのが、プレイセンターの始まりであるとして、50年の歴史を振り返っている。初めは全くの民間の活動として始まり、一定の施設をもたずに公民館や元校長の自宅、あるいは公園を利用したりなど、また運営日も週1回から週5回など、様々な多様性をもって運営してきたものが、様々な名目の助成金が得られるようになるにつれて、次第に政府の関与が強まっていったのだという。そして、今後の可能性として、幼稚園、保育所による「教育の専門化」に対して、家庭までも含んだ全体としての教育のあり方を考える視点を与えてくれている点や、「親の成長」と「生涯の友」がプレイセンター最大の魅力であるとして、親の成長が実感される自己学習機関であり、子どもによりよい環境を与えるために自発的に学び、自ら考えることをエンパワーメントするプレイセンター特有の価値が、日本においてもその教育全体の

バランスを保つ上で極めて重要であると言っている。

松川(1998)<sup>15)</sup>もまた、ニュージーランドのプレイセンター運動を振り返っているが、その創設は、1941年にウェリントンの三人の中産階層有志の母親によってなされたと言う。1943年には、ウェリントンに10か所、クライストチャーチに5か所、パーマストンノースに3か所、計18か所のプレイセンターが出来ていたようであるが、松川は、プレイセンター運動を、親が親を保育者(Supervisor)に養成する親教育としての点から位置づけている。また、発足当時、幼稚園教員を勤務時間外の午後に雇用して実施されることが多かったプレイセンターであったが、1948年に政府が幼稚園教員への給与の支払いに同意し、幼稚園が午後の保育も展開するようになると、保育者養成の必要に迫られることになった経緯を説明し、子どもの自発的な遊びを重視する保育者養成(親教育)プログラムが、大学による地域の成人教育などとの協同的な関係から構築されていった点に、子育ての支え合いに成人教育が統合されていく視点からの位置づけを行っている。

また、佐藤(2009)<sup>16)</sup>は、子育ては母親がするべきだとする祖国イギリスの伝統的育児観を背景にもつニュージーランドにおいて、プレイセンターが全盛期であった1960～1970年代に、利用者たちがどのような動機でプレイセンターを選んだのかについて、3人の元参加者にインタビュー調査を実施している。その中で、母親が家族のために献身的に働くという1960年代のイデオロギーの影響を受けると同時にそれへの反発から、「良い母親であること」と「育児を社会化する」ことの両方を満たすことのできる装置としてプレイセンターへの参加があったことを指摘し、結論づけている。

さらに、島田(2012)<sup>17)</sup>は、保育の様々な場面に参加・関与するという意味のParental Involvement(PI)の視点から、ともすれば親の負担も受け止められる側面をもつPIのプレイセンターでの実践についてその歴史的展開を追いながら、検討している。プレイセンターを選択する保護者たちは、できる限り子どもの発達や成長に寄り添い、遊びや学びをともにした方がよいという信念をもち、自分自身の学習意欲も高いという調査結果がある反面、プレイセンターのセッションの準備と実施に費やす時間のために家族の多くの時間が割かれていることによる多忙感や、義務感、負担感、不公平感といった思いももっていることを指摘している。しかし、減少傾向が続くプレイセンターにあっても、負担を承知でプレイセンターを選ぶ保護者はおり、「家族は共に成長するFamilies Growing Together」という理念を保持しながら継続する中で、その環境が、保護者の学ぶ意欲や、子育ての主体であるという自覚を促していると言う。

以上、池本(1999)・松川(1998)・佐藤(2009)・島田(2012)は、プレイセンター運動の歴史的側面について、当時の社会的背景や、保育政策の影響を受けながら、そこでの親教育や親参加がどのようにしてなされてきたのか、また、それは参加する保護者にとってどのような意義を有しているのかという視点から検証していると言える。

次に、七木田(2003)<sup>18)</sup>と正保(2013)<sup>19)</sup>は、それぞれ、南島ダニーデンDunedinと北島ノースショアNorth Shoreにあるプレイセンターでのセッションやインタビューを通じて、その保育の原理と具体的な保育内容の検討、あるいは、6コースからなる親教育プログラムのコース1のテキストの内容

の検討などを行っている。特に、七木田(2003)は、ニュージーランドにおける教育の特徴のキーワードとなっている「diversity(多様さ)」を挙げ、日本においても多様な子育て支援の基盤整備が望まれると結んでいる。

そこで、最後に、1990年代よりニュージーランドならびにプレイセンター研究を積み重ね、その成果を日本ニュージーランド学会や日本保育学会等で発信しながら、ニュージーランドのプレイセンターが、我が国の就学前教育や子育て支援に与える示唆を、日本版プレイセンター活動を前出の池本とともに、創設・展開(2000年～)することで実践的に追究している久保田の研究(1999,2001,2002,2012)<sup>20)</sup>に注目したい。1989年の1.57ショック以来、深刻な社会問題として進行し続けている少子化への対策として国を上げての施策が次々と打ち出されてきている日本の社会状況で生まれてきた「やってあげるばかりの子育て支援」は、親が親として、保護者として成長する機会を奪ってしまうと久保田は深く危惧する。「子どもを産み育てやすい社会」「地域社会が子どもを育てる」といった子育て支援のスローガンは、子育ての代行を押し進める結果となり、子育て支援の本来的な「協働性」や「自主性」、そして、「相互支援」のありようを危うくしていると言うのである。そして、多様な就学前教育の場が存在する一方、テ・ファリキTe Whārikiによって就学前教育の内容が統合されている点は、「教育の機会均等」を具現化する上で示唆的だと指摘する。また、日本の就学前教育のあり方を考える上で、ニュージーランドの「自分のことは自分でやる」という精神文化や、多文化共生社会、異文化理解への志向性も、また、学ぶべき示唆だと述べている。

以上、プレイセンターに関するいくつかの先行研究を見てきたが、子育ての当事者である保護者にとっての意義や、我が国の子育て支援に対する示唆もさることながら、もう一方の当事者と言える子どもが学び育つ場として考えてみるとどうなるだろうか。例えば、セッションと言われる遊びの時間と空間を子どもと大人が共有することについて、保護者が自分以外の子どもともかかわりをもつことについて、また、異質なものを排除しない「多様性」をもち、「異年齢」「異文化」が「共生」する場に身をおくことについてはどうか。ワークショップと言われる学習会でテ・ファリキTe Whārikiを学び、子どもの遊びを学び、遊びの環境を学び、子どもの育ちを記録することを学ぶ大人に見守られながら、経験できる内容とはどのようなものだろうか。そして、養成課程にある本学科の学生が訪問するとしたら、どのような意義が期待できるだろうか。そうした問題意識から、実際にプレイセンターを視察することにした。

## 6. 現地プレイセンター Playcentre視察の内容と結果

本節では、筆者が本学科の海外研修の引率補助として同行した2014年3月に現地パーマストンノースPalmerston Northで行った2か所のプレイセンターの視察について振り返る。

### (1) 視察先施設と視察日

パーマストンノースが位置するCentral Districtsの地域協会にある20のプレイセンターのうち、パーマストンノースには、Milson Playcentre, Parkroad Playcentre, Terrace End Playcentreの3か

所がある。今回の視察では、前者の2か所を2014年3月6日と、3月10日の午前中2、3時間視察した。以下、視察訪問時のスタッフへのインタビューならびに、ニュージーランドの全国プレイセンター連盟New Zealand Playcentre Federationのホームページ(www.Playcentre.org.nz)の情報から両施設について簡単に紹介する。

※Parkroad Playcentreの野外活動日であった3月7日にも、活動場所のメモリアルパークを訪問した。その日は、子どもと大人合わせて25、6名の参加があり、中にはダウン症の子どもや日本人の母親も含まれていた。また、全国プレイセンター連盟の役員も来ており、話を聞くことができた。

#### 施設A: Milson Playcentre

- ・位置：街の中心であるスクエアThe Squareから北へ進んだ空港近くの住宅街の一角に位置する。一軒の家のような小ぢんまりした規模である。
- ・保育時間： 月 9:00-12:00 火 9:00-13:00  
水 9:00-12:00 木 9:00-12:00
- ・この日の参加者：リーダーの親子のほか5組 ※2名の子どもは、母親ではなくナニーが同伴。

#### 施設B: Parkroad Playcentre

- ・位置：街の中心であるスクエアThe Square近くにあり、学校や広大な公園に隣接している。マッセイ大学へも歩いて10分程度の位置関係である。幼稚園・保育園のような面積と設備の園舎、大きな木々や立派な固定遊具を備えた広い園庭をもつ。
- ・保育時間：  
月 9:00-12:00 火・木・金 9:00-12:00  
水 9:00-13:00 ※この日は、4歳の子どもが対象。小学校就学準備として、身の回りのことや日課を意識した内容であると言う。当時は、10名が在籍。
- ・この日の参加者：マッセイ大学出身の有資格者(Early Years Degree 0-8 of age)のリーダー1名ほか4名のスタッフと子ども13名。

※リーダー以外の4名の母親のうち、2名はコース1修了者、2名はコース2修了者。スタッフ以外の保護者も5名ほど参加していた。途中から日本人親子4名が参加。日常的には、19～25名程度の子どものが、週2-3回(最低週2回)をこのプレイセンターで過ごしているという話だった。

(2) 視察内容：主なものは以下のとおりである。

- ① 保育の流れ、② 保育者の動きと運営体制 ③室内環境(遊びのコーナー設定と教材・遊具など、キッチン・トイレ、事務室など、荷物置き場や掲示物など)
- ④ 室外環境(固定遊具、移動遊具、生き物、遊具倉庫、出入口、など)
- ⑤ 子どもの遊びの観察 ⑥ 保育計画について ⑦費用について

(3) 視察結果：(2)で挙げた①～⑦の項目別に以下にまとめる。

### ① 保育の流れ

保育の流れは、いずれのプレイセンターも、9:00 過ぎくらいから親子の登園が始まり、登園後は、すぐに自由に遊び始めた。施設規模の大きなBの施設では、その日の担当の保護者は、9:15 から15分間くらい、スタッフミーティングを行っていた。住宅街にこぢんまりとあるAの施設では、9:30くらいから、楽器などのおもちゃが置いてあるコーナーに全員が集まってリーダーの母親を中心に、歌やリズム遊びを楽しんだあと、モーニングティーの時間となり、子どもたちは果物を食べていた。施設Bの子どもたちも、10:00頃から庭で収穫したfeijoaという緑の実を自分たちでナイフで半分に切り、スプーンですくって中の果肉を食べた。そのあと再び、自由に遊び、11:30から11:45くらいの間に昼食、その間Bの施設では、再びスタッフミーティングを行い、その日の子どもたちの遊びを計画やねらいとともに振り返っていた。その後、いずれの施設でも、避難訓練があり、片づけとなった。最後に、11:45～12:00くらいにリーダーのもとに集まり、手遊びやお話などを楽しんでいた。

### ② 保育者の動きと運営体制

保育者の動きは、いずれにおいても、ゆったりと自然な雰囲気であった。子どもと一緒に庭でトレーに入れた泡をかきまぜたり、すくったりしてフィンガーペインティングをして遊んだり、庭にテントを組み立てて一緒に中に入ったり、水を流して遊んでいる子どもの後ろから見守っていたりした。また、必要に応じて、遊具を出したり、片づけたりもしていた。施設Bでは、アジア系の服装をした母親が、静かに我が子と砂場で遊んでいた。周囲の保護者は無理に話しかける風ではなく、タイミングを見て、ポツリポツリと話をしている様子であった。

また、運営体制については、どちらの施設にも曜日別にスタッフとなる保護者のシフト表があった。施設Aのリーダーは自分の子どもを連れてきていたが、施設Bのリーダーは、年配の子育て経験者であり、リーダー歴2年ということであった。また、親教育プログラムについては、全6コースのうち、コース1は必須とされているが、Bの施設では、だいたいの保護者は、コース1かコース2までを修了するのに対して、今回の視察先とならなかったTerrace End Playcentreでは、コース4までが一般的であると聞いた。各プレイセンターにEducation Officerが来て、コースブックをチェックし、終わると、証明書を渡してくれるということであった。

### ③ 室内環境

室内は、積み木や楽器、パズルなどの玩具コーナー、ソファのあるコーナー、衣装やかばんや人形・ベッドなどのあるコーナー、製作活動のための用具や材料のあるコーナー、絵本のコーナー、食事のためのコーナーなどがある。玩具・用具・材料は豊富に配置され、造形や音楽、ごっこ遊び、描画、数や量、言葉の経験が十分に保障された環境構成となっている。さらに、文化や人種の多様性が受け入れられ、落ち着いて遊びに取り組めると同時に、挑戦や探求が可能な環境が認められた。室内の一角には、幼稚園や保育所と同様に、子ども一人一人の学びの物語が記録されたポートフォリオが並べられていた。特徴があるのは、室内

と戸外の間をつなぐテラスの空間で、施設Aでは、スロープになっている部分で、男児たちが乗り物を走らせ、保護者たちが車座に座って話をしていた。Bの施設では、広いテラスに、木工のコーナーや、小さなステージとピアノのあるコーナー、描画のイーゼルが並べられたコーナーなどがあつた。

#### ④ 室外環境

Aの施設は小さな庭ながら、砂場は広く区切られており、木製の大きなクレーン車などの遊具が置かれていた。チップが敷き詰められた部分には、運動遊具が設定され、粗大運動が楽しめる環境があつた。Bの施設は、広い庭に広大な砂場、すべり台やぶらんこをはじめ、複数の大型固定遊具が配置され、水遊び場があり、また、たくさんの木々の緑に囲まれて、広い公園の中にいるようであつた。いずれの施設にも、遊具をしまう十分な広さの倉庫があり、セッション後の片づけでは、この倉庫に外に出していたいろいろな遊具をしまっていた。

#### ⑤ 子どもの遊び

子どもたちは、室内で黙々と遊具に向かって遊んでいる子ども、人形のベビーカーを押して歩いている子ども、砂場に入って乗り物で遊んでいる子ども、大人が用意したフィンガーペインティングの泡を楽しんでいる子ども、庭にある幅の広いすべり台に古いマットをもって上がり、そ



図IV-6 <フィンガーペインティング>



図IV-7 <マオリ語と英語>



図IV-8 <園庭側からみたプレイセンターの建物全>



図IV-9 <多様な人種の赤ちゃん人形>



図IV-10 <広い砂場でのびのび遊ぶ>



図IV-11 <大きなすべり台をマットに乗って下りる>

のマットの上に乗って滑り降りることを繰り返している子ども、雨どいのような容器を使って水を流している子ども、などにさまざまである。集団の規模が小さいため、子どもたちもゆったりと過ごしているように感じられた。

#### ⑥ 保育計画

Bの施設では、1年を4つのtermに分け、各期2回ずつ2～3時間のPlanning Meetingを実施していた。Activities, Social Skills, Physical Development, Disposition (Interest)の4つの領域について、一人一人の子どもについての計画を立てるとのことであった。Aの施設では、テ・ファリキに即した保育内容を互いに話し合いながら進めているとの答えであった。また、教育評価局から3年に一度、3,4名のチームが1週間プレイセンターに入り、Documentation, Playing Children, Planning, Portfolio, Maori Cultureなどの観点から評価を行っているという。

#### ⑦ 費用

Bの施設に来ていた母親が普段通っているというTerrace End Playcentreの場合についてその費用を尋ねると、2010年7月より、プレイセンターも無償化の対象となったため、3歳以上の幼児は費用がかからないとのことだった。2歳以下は、週3回1学期(10週間)で、一人約65NZドル(約5,200円)で、料金については、各プレイセンターで話し合っていると話していた。また、国からの補助金は、有資格保育者qualified teacherがいることによって上がるとのことであった。

### 7. まとめと考察

視察先のプレイセンターで、保護者が保育を行う様子を見て、また、十分に整えられた保育環境から、先行研究において確認されたように、プレイセンターの保育にも、ナショナルカリキュラムであるテ・ファリキTe Whārikiの理念が実践され、一定の保育の水準が守られていることを実感した。遊びや育ちをとらえる視点をもった大人に見守られ、落ち着いて遊びに没頭している子どもた

ちの姿が見られたからである。これには、親教育のためのコースブックの内容をチェックし、それぞれのコースにおいてワークショップやミーティングを計画・実施する、各プレイセンターのEducation Officerの役割も見逃せない。

また、年齢の近い子どもが過ごしていたAの施設に比べ、Bの施設では、6か月から5歳になる前までの異年齢の子どもが過ごしており、ドイツから来たという母親は、異文化から来た自分達親子が、このプレイセンターでいかに十分に受け入れられてきたかを話し、スペイン人の母親や、インド人の夫をもつ母親は、毎日来ていると言っていた。また、ニュージーランド人の夫をもつ日本人の母親は、20年間日本人であることで差別を受けたことは一度もないと教えてくれた。このように、異年齢保育と多文化共生のありようを目の当たりにすることが出来たことで、久保田(2002)の言うように、プレイセンター活動がもつ「異文化理解教育」の側面へと視野を拡大すると、多様な文化、言語、習慣をもつ様々な人種の人々がいる社会の実際を学ぶ上で、就学前という好機は他にないという主張が頷ける思いであった。

日本の社会において、異文化理解・多文化共生の必要性を考えさせられる経験や、異年齢保育の実際に触れる経験が、これまでほとんどなかったであろう、本海外研修に参加する学生に対して、「プレイセンターPlaycentre」というニュージーランド独自の認可保育施設を訪問研修先とする可能性について考えてみたい。まず、様々な人種や文化、様々な家族、また様々な年齢の子ども達と一緒に遊び生活する姿と出会うことのできる場として、ニュージーランドという国がもつ多様性への寛容さとも言える文化的特徴を経験できるという点において、十分その意義が認められると言えよう。次に、「家族はともに成長する」という理念の下、6コースからなる親教育プログラムをもつ特色ある就学前保育施設で現地の保護者と出会うことにより、その家族や子育てに対する姿勢を学ぶことができるという点において、日本における「子育て支援」の理念や実践との比較考察をする上でも、その意義が十分にあると考えられよう。そして何よりも、本研修の参加学生の実態から、こうした保育施設が認可施設として成立・維持できるための運営方法や保育の質を保障しているニュージーランドの特色ある保育制度の仕組みを知ることは、翻って改めて日本の保育制度をはじめとする保育に関する種々の事柄について理解し、考えようとする契機を与えてくれるであろう。

※本稿は、日本子ども家庭福祉学会第15回全国大会における口頭発表(「ニュージーランドPlaycentreにみる子育て支援機能の特徴」)の内容をもとに、本論全体のテーマに沿って新たなデータを加え、書き起こしたものである。

(矢萩恭子)

## V. 総合考察

これまで、本学科における保育学生によるニュージーランド海外研修プログラムの成果と課題の検証、ならびに、それに対する新たな訪問研修先の可能性の検討を行ってきた。近年、本学科を

志望する高校生の動機として本海外研修プログラムを挙げる生徒が増加している実態や、中には既に高校時代に何らかの海外留学経験をもつ学生もいることを考えると、「海外研修(子ども)」という選択科目は、単発の学外行事に留まらず、本学科の教育課程全体における位置づけおよびその意義を改めて確認し、保育者養成に資する教育効果について、明確にする必要性が浮上している。こうした海外研修プログラムの成果や教育効果については、学術情報データベースで見ると、看護や医学・薬学、農業技術、工学技術、経済協力、そして英語教育の分野等では、ニュージーランド、オーストラリアに関しては、日豪NZ教育文化学会紀要<sup>21</sup>に、学校種ならびに目的が異なるものをいくつか見ることができるものの、その多くは、実践報告に留まっており、特に、保育分野での論究は少ない。

本論は、本学科の保育者養成の理念や目的と照らして、今後さらに本海外研修プログラムをよりよいものとするための一つの試みである。それは、また、学科が目指す「子ども未来学」探究の一つの道筋として、少子化や待機児童問題ほか子どもを取り巻く環境の変化により、また、2015年4月の子ども・子育て支援新制度施行による制度改革の流れにおいて、保育や保育者の質の向上を担う保育者養成校として、協定先大学や保育実践の場との研究協力にまで発展する可能性をもつべきものであると言えよう。

### 〈注〉

- 1) 松川由紀子『ニュージーランドの子育てに学ぶ』小学館,2004年,p.131
- 2) マーガレット・カー,大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』,ひとなる書房,2013年,p.307
- 3) 前掲書 2,p.309
- 4) 一般社団法人日本保育学会第67回大会国際シンポジウム(国際交流委員会, OMEP日本委員会, 大会実行委員会共催)資料データをもとに作成。なお、本シンポジウムは、教育省の政策分析官カール・レ・クエスンKarl Le Quesne氏と2012年にニュージーランド教育実践優秀賞を受賞した幼稚園の首席教諭キャロル・ハートレイCarol Hartley氏を迎えて大阪総合保育大学にて2014年5月17日に行われた。
- 5) Ministry of Education of New Zealand 'Annual ECE Census:Summery Report 2013'  
<http://www.educationcounts.govt.nz/statistics/ece2/annual-ece-summary-reports-2014/12/18> 閲覧
- 6) 5に同じ。
- 7) 5に同じ。
- 8) 大宮勇雄『保育の質を高める』ひとなる書房,2006年,p.40
- 9) 前掲書 2,pp.309-310
- 10) 前掲5のホームページ
- 11) 前掲書 2,p.310
- 12) Margaret Carr 'Assessment in Early Childhood Settings' 2001, p.5
- 13) 大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房,2010年,pp.140-188
- 14) 池本美香「プレイセンター50年の歩みと今後の可能性」日本ニュージーランド学会誌第6巻,1999,pp.2-15

- 15) 松川由紀子「ニュージーランドのプレイセンター運動について－子育ての支え合いと成人教育の結合－」山口県立大学社会福祉学紀要第4号,1998年,pp.41-55
- 16) 佐藤純子「戦後ニュージーランドのジェンダー観の変容とプレイセンターにおける育児－1960年代から1970年代の参加者の語りから」日本ニュージーランド学会誌第16号,2009
- 17) 島田礼子「ニュージーランド プレイセンターの特質と課題－Parental Involvementの視点から－」広島大学大学院教育学研究科紀要第三部第61号,2012,pp.207-213
- 18) 七木田敦「ニュージーランドにおけるプレイセンター運動の展開－理論と保育内容を中心に－」広島大学教育学研究科紀要第三部第52号,2003,pp.317-323
- 19) 正保正恵「ニュージーランドの保育システムにおける親教育－プレイセンターにおける教育ディプロマテキストを中心にして－」日本家政学会家政学原論部会報No.47,2013,pp.14-21
- 20) 久保田力「Playcentreにおける保護者たちの協働的「parenting」学習プログラム」日本ニュージーランド学会誌第6巻,1999,pp.29-40 / 「わが国におけるPlaycentre活動の先験的試み」日本ニュージーランド学会誌第8巻,2001,pp.12-18 / 「PlaycentreおよびKohanga Reoにおける異文化理解教育」日本ニュージーランド学会誌第9巻,2002,pp.16-21 / 「ニュージーランドの就学前教育から学ぶ日本の「子育て支援」と「幼保一元化」の課題～「プレイセンター」と『テ・ファリキ』を手がかりに～」相模女子大学子ども教育研究第4号,2012,pp.57-68
- 21) 小林健「ニュージーランド中高等学校の日本人生徒受け入れ目的に関する実態と考察」日豪NZ教育文化学会紀要第3号,2004,pp.23-37, 飯田浩行「中等教育におけるアジア人留学生－カンタベリー地区における調査－」同,pp.38-51, 久村研「中等教育における海外研修の教育効果測定をめぐる課題」同第5号,2006,pp.1-14 など。

#### 〈図版典拠〉

- ・ 図Ⅱ-1, 2            筆者撮影
- ・ 図Ⅳ-6 ～ 11       筆者撮影

